



金融取引の時間論的論理はいかなるものであるか : エレナ・エスポジトの金融システム論を中心とし て

金, 信行

(Citation)

社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:153-163

(Issue Date)

2022-06-30

(Resource Type)

research report

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009424>



第12章 金融取引の時間論的論理はいかなるものであるか エレナ・エスポジトの金融システム論を中心として

金信行

第1節 学術的背景と問題

近年、金融領域を扱う社会学的研究が盛り上がりを見せている。20世紀後半以降、1987年の世界的な株価大暴落であるブラックマンデーや1977年のアジア諸国で起きたアジア通貨危機などの金融危機は周期的に発生しており、金融に関わる動向は世界の経済状況だけでなくわれわれの日常生活にも大きな影響を与えてきた。このように金融領域は現代社会を左右する重要アクターとして存立しているが、金融領域が高度に専門化していることもあり2000年代まで金融現象を社会学／文化人類学的に分析する試みはあまり見られなかった。しかし2000年代以降、この高度に専門化した金融領域の諸現象へ社会史や参与観察の手法を用いてアプローチする金融社会論（Social Studies of Finance）が、経済社会学／経済人類学の分野で多くの研究成果を発表しており〔Knorr-Cetina and Preda eds. 2005, 2012; Preda 2007, 2017〕、重要な研究動向として注目されている。

そしてこの金融社会論では金融領域に現れる時間の特殊性がしばしば論じられている。例えば、オーストラリアの社会学者リサ・アドキンスは、金融取引の論理がもつ時間論的特殊性を指摘している〔Adkins 2018: 2〕。すなわち、金融取引の論理は過去—現在—未来という単純な時系列的時間に則っておらず、出来事は予測不可能な形で展開するユニークな性格を備えているというものだ。時間の社会学においては社会の各領域において異なる固有の時間が存在することが指摘されており（本論集第1章鳥越論文）、本章が言及する社会システム論の時間論では経済の領域においてリスクという時間拘束の形式を資源として固有の時間が生じることが論じられている（本論集第3章梅村論文）。これらを踏まえて、本章は「金融取引の時間論的論理とはいかなるものであるか」というテーマを論じる。

このテーマに取り組む上で、本章が中心的に検討する議論はイタリアの社会学者エレナ・エスポジトの金融システム論である¹。エスポジトは、ルーマンの社会システム論を基礎として、金融領域に現れる固有の時間に着目して金融現象の成立過程を記述する理論を構想した²。より具体的には、ルーマンの時間論を軸としつつ、経済学的知識が現実の経済へ作用することに着目した経済社会学の遂行性アプローチを批判的に継承し、時間に焦点を当てて金融現象の作動過程を抽象的に提示した金融システム論を提示した。本章は、このエスポジトの金融システム論の検討を通じて、金融領域にみられる固有の時間論を明らかにする。

本章の具体的な構成は、以下の通りである。まず第2節では、エスポジトが参照したルーマンの時間論を確認する。第3節では、エスポジトが自身の理論を展開する上で批判的に検討した、経済社会学の遂行性アプローチの内容を、事例分析を参照しながら確認する。そし

て第 4 節では、エスポジトが提示した金融システム論の内容をエスポジトの事例考察とともに検討する。最後に第 5 節では、これまでの議論をまとめた上で、社会システム論の文脈でのエスポジトの議論の評価についてごく手短かに言及したい。

第 2 節 ニクラス・ルーマンの時間論

ルーマンの社会システム論の体系は極めて複雑なものであるが [cf. 長岡 2006]、ルーマンの理論体系で用いられる区別のうち、時間にかかわるものは三種類ある [梅村 2020: 66]。第一に、システムの作動を規定する根本図式であるシステム/環境がある。第二に、意味の三次元を構成する事象的次元/時間的次元/社会的次元の区別がある。そして第三に、近代社会で人々に用いられる時間感覚としての、現在/過去/未来である。このうち本節がとりあげるのは、第三の区分の時間論である。

時間に関するルーマンの問いは時間の観察にかかわるものであり、ルーマンは観察の区別は前近代から近代への移行に伴って変化したと論じている [小松 2003: 39-42]。ルーマンが時間について投げかける問いは、「時間とは何か」ではなく「いかにして時間が観察されているのか」である。そしてこの時間の観察において、前近代と近代ではまったく異なる区別が用いられていた。前近代において——ルーマンが多用する表現では「旧ヨーロッパ的な」伝統——、時間は流れるもの/固定されたものあるいは運動しているもの/運動していないものといった区別で観察され、この区別では固定されたものや運動していないものが有意に扱われていた。しかし、17 世紀以降、あらゆるものが時間によって変化するという認識がもたらされ、過去/未来が時間の観察に不可欠な区別として登場した。この区別において、過去/未来を区別する時点こそ現在であり、過去として想起されるもの、そして未来として予期されるものはそれぞれの現在において同時的に構成されるのである [小松 2003: 43]。

この過去/未来を区別する時点としての現在という時間論と不確実性とのかかわりを論じたルーマンの議論は [小松 2003: 45]、エスポジトの議論を理解する上で極めて重要なものである。ルーマンの議論において、未来にかんして予測を立てた上で行う現在の決定は、予測されたものとはまったく異なる未来を作り出す。つまり、現在から予測される現在の未来と現実に現れる未来的現在の差異が拡大する。未来の危険性を計算した上で下される現在の意思決定によって、まったく未知のリスクとしての未来が到来してしまうのである。

第 3 節 経済社会学における遂行性アプローチ

遂行性アプローチあるいは経済学の遂行性 (performativity of economics) は、金融社会論を代表する理論枠組みである。遂行性アプローチは、科学技術社会学のアクターネットワーク理論 (Actor-Network Theory: ANT) の影響を受け [cf. Kim 2019]、経済現象や経済的行為の形成において計算装置や経済学理論が果たす作用に着目する立場である [Zelizer 2007: 1066-7; Aspers et al. 2015: 20]。代表的論者には、ブリュノ・ラトゥールと並び ANT の指導

的理論家であるミシェル・カロン、統計学や核ミサイルの成立過程の社会構成主義的研究で知られるドナルド・マッケンジーがいる。カロンとマッケンジーの研究を受けて、経済社会学では実験装置や科学的知識など非人間の役割にいち早く注目した科学技術社会学の知見の摂取が積極的に行なわれている [Pinch and Swedberg eds. 2008]。

カロンは遂行性アプローチの大まかな方針を与え、マッケンジーが重厚な事例分析の展開とあわせて遂行性アプローチを経験的研究の理論枠組みとしてより使いやすい形で提示した。カロンは遂行性アプローチについて、「エージェンシーが分散的であること、現実の市場が変数と可変的な配置を備えた集合的な計算装置から成ること」 [Callon 2005: 3] と述べるにとどまり、遂行性が生じている状態がいかなるものかについて説明を施さなかった。マッケンジーは経済学の遂行性を四類型に分類しているが [MacKenzie 2007: 55]、本章での議論との関連で重要な議論は「経済学的知識の活用によって経済プロセスが経済学的記述に近づくこと」を指すバーズ的遂行性 (Barnesian performativity) である。マッケンジーはこのバーズ的遂行性の概念を用いた金融現象の社会史研究を行っている。

マッケンジーが経済学の遂行性を論ずる題材として選択したのは、金融市場におけるオプション取引の爆発的な普及に大きく貢献した、ブラック-ショールズ-マートンモデル (BSM モデル) である³ [cf. Black and Scholes 1973; Merton 1973]。オプション取引とは、約束の日時に任意の商品を約束価格で売買する権利の取引である [相田・茂田 2007: 186]。原理的にはあらゆる商品が対象となるが、金融市場であれば株式や債券といった金融商品が権利取引の対象商品となる。従来はオプション価格の算出が直感に頼るものであったため、オプション取引の普及は進まなかったが、オプション価格の算出方法に理論的そして数学的基礎を与えたのが BSM モデルであった。

BSM モデルは、経済学における一物一価と効率的市場仮説を前提とした方程式である [城田 2017: 36]。一物一価とは、市場全体の需給にもとづく価格決定によって同質の商品には同一の価格のみが成立するという前提である。そして効率的市場仮説とは、市場参加者は利用可能なすべての情報にアクセスでき、取引商品の価格には常にすべての情報が反映されているという前提である。したがって、BSM モデルが算出するオプション価格は、必ずしも現実を反映しない理論的前提に立脚したものであった。

BSM モデルの登場は、世界初のオプション取引所の誕生と時期を重ねるものであった。1973年4月26日にシカゴ・オプション取引所 (Chicago Board Option Exchange: CBOE) が開設され、ブラックとショールズの記念碑的論文は『経済学研究』誌の5/6月号に掲載された。CBOEの開設とBSMモデルの発表には若干のタイムラグがあったが、ブラックらの研究は一部の金融実務家には既に知られていた [MacKenzie 2007: 60]。BSMモデルの発表以降、BSMモデルのコンピュータ処理で算出した各銘柄のボラティリティやオプション価格を載せた、ブラックのシートが月額300ドルを払う購読者に毎月配信された。当時ボラティリティを概算するサービスの購読が月額15ドルであったことを考えると、ブラックのサービスは高額であったが、トレーダー間のコピーの融通などもあってブラックのシートは

広く出回ったようである [MacKenzie 2007: 61]。

BSM モデルが現実の経済に大きな影響を与えた要因として、マッケンジーは 5 点提示しているが、本章では主要な 4 点について記述する。まず、トレーダーが BSM モデルを好んで活用した理由にかんして 3 点ある。まず第 1 に BSM モデルの経済学的成功である [MacKenzie 2007: 69-70]。オプション価格の算出方法にかんしては、BSM モデル以外にも競合するアプローチが幾つかあったものの、BSM モデルは金融経済学者によって既存のモデルより優れたものとして高く評価された。経済学、とりわけ金融経済学は権威づけの源泉として極めて高いステータスをもっていた。

そして第 2 に BSM モデルの概念的わかりやすさである [MacKenzie 2007: 70]。無論、BSM モデルは専門家以外には極めて難解なものである。しかし、金融実務家にとっては他の競合モデルと比べて概念的な理解が容易であった。特殊な概念として理解を要するのはボラティリティであるが、株価の変動率というのはトレーダーにとって馴染みの薄い話ではない。対照的に、競合するモデルの 1 つでは例えば、6 個の回帰係数という金融実務家にとってまったく馴染みのない概念が登場するため、計算方法だけでなく概念的把握も極めて困難なものとなる。

第 3 に BSM モデルの公開性の高さである [MacKenzie 2007: 70-1]。1960 年代～1970 年代までのアメリカ法では、金融取引に関わる技術は特許の対象とならなかった。競合モデルの考案者は将来の特許化に備えてモデルの詳細を明かさなかったのに対して、ブラックらは自らの研究成果の細部を積極的に公開した。さらに、モデルを公開した者たちのなかでも、ブラックらは広く一般の金融実務家が扱える形で知識を商品化した。このように BSM モデルは、アクセス性に優れたものであった。

これらに続く点は、BSM モデルの選好にかかわらずこのモデルが現実の経済へ影響を及ぼした要因である。第 4 の要因は BSM モデルの理論値を受けたオプション取引の競争状態の成立である [MacKenzie 2007: 71-2]。先ほど述べたように、BSM モデルは精度の高い理論であったが、実際のオプション価格と比べてやや低めのオプション価格を算出する傾向にあった。このズレに直面したトレーダーのなかで BSM モデルの正しさを信じた者は、本来の価値より過大評価されていると思われる実際のオプションを売却する。この売却が一定程度行われると、供給の増加から実際のオプション価格の値下がりが起こる。たとえ BSM モデルの信頼性に疑問を抱いていた者でも、モデル信奉者の行動でオプションの値下げ競争が一度始まった状況では、自らがもつ当該オプションの価格を値下げせざるをえなくなる。このようにして、BSM モデルに賛同しないトレーダーや興味をもたないトレーダーでもその遂行性の実現に手を貸さざるをえなくなる。

以上のように、遂行性アプローチは経済理論が金融現象に介入し、金融現象が経済理論の世界像に近づく／遠のく様に着目する理論的視座であった。マッケンジーの研究を概観すると、①オプションは未来への予想に基づいて現在の値段が決定されるという時間的要素を含む存在であること、②未来への予想を決定する要素として経済理論が重視されている

ことがわかる。エスポジトによれば、金融現象の参加者は、他者が彼らの意思決定をいかに観察しているかや他者がいかに行為するかに基づいて、意思決定を行う [Esposito 2013a: 111-2]。遂行性アプローチは、経済理論による金融現象の構成作用を明らかにした点で優れた業績だが、金融現象の構成作用の担い手には単に知識だけでなく取引や投資といった行為をはじめとした様々な要素が含まれているにもかかわらずこの点が十分に焦点化されていない [Esposito 2009=2011: 97]。オプションを含めた金融商品の時間的要素だけでなく、金融商品の価格予想やリスクやそれを参照して行われる行為によって成り立つ金融取引の時間論的論理を明らかにしたのが、以降でとりあげるエスポジトの金融システム論なのである。

第4節 エレーナ・エスポジトの金融システム論

(1) 金融システム論の理論構想

エスポジトの認識において、金融市場で中心的な取引商品であるデリバティブ [金融商品の金融商品] の価格は、通常の商品のように需要と供給ではなく、トレーダーの期待や他者の期待によって決まる [Esposito 2013a: 106]。たとえば、日経 225 オプション取引の場合、日経平均が 2 万円を超えるという予想が多ければ、日経 225 オプションの価格が上昇する。反対に、日経平均が 2 万円を下回るという予想が多ければ、日経 225 オプションの価格は下降する。エスポジトの認識において、金融現象は期待や予測を行う行為者によって構成されている。

エスポジトによれば、主流派経済学では期待や予測を行う観察者という行為者像が排除されてきた。たとえば、経済学の重要な仮説として効率的市場仮説というものがある。これは、市場参加者は利用可能なすべての情報にアクセスでき、取引商品の価格には常にすべての情報が反映されているという前提だ。しかし、現実と照らし合わせてみると、金融取引にかかわるトレーダーが、取引にあたって、取り扱う金融商品の評価に必要なすべての情報を把握できているわけではない。また、金融商品の価格がプラスとマイナスの情報のすべてを反映して真正なものになっていることもありえず、価格の歪みを観察したトレーダーによる売買行動がその価格を左右している。

観察者が経済事象を構成するというエスポジトの議論において、エスポジトが前提とするのは、サイバネティクス論者ハインツ・フォン・フェルスターの観察の理論である [Esposito 2013a: 115, cf. 長岡 2007: 184-198]。この理論では、観察は 2 種類に分けられる。第 1 にファーストオーダーの観察であり、対象の観察を意味する。第 2 にセカンドオーダーの観察であり、観察者と観察者が観察する対象の観察である⁴。エスポジトがとりわけ重視するのは、後者のタイプの観察である。

金融領域において観察にもとづく意思決定を可能にする重要な参照先として、金融商品の価値を評価する格付け機関が行う格付けがある [Esposito 2013b: 9-13]。セカンドオーダーの観察においては、観察は無限後退に陥る可能性がある。BSM モデルの事例で考えると、BSM モデルを参照した他者の予測や想定を観察し、BSM モデルが前提としている経済学的

仮定を観察し、この経済学的仮定が前提としている仮説を観察するという具合に、確実性を求めるあまり観察を深掘りすると意思決定を下せなくなってしまう。そこで、金融領域においては格付けが参照される。格付けとは、国債やデリバティブなどの金融商品にかんして格付け会社が行う安全性の評価である。金融市場において格付け会社は、投資家と会社の間にある情報の非対称性を埋め、金融商品の取引価格に反映されない情報を提示する。もっとも、格付けでさえ情報の非対称性があることには注意が必要である。格付け会社が金融商品に対して本当に正しい格付けを与えているかどうかはわからず、たとえば金融機関との癒着などの可能性は否定できない。

観察の理論によって遂行性の事例を考察すると、次のようになる [Esposito 2013a: 117-9]。まず第 1 レベルの遂行性があり、これはファーストオーダーの観察に該当する。オプション取引市場の事例で考えると、具体的には BSM モデルの発明によってオプション取引市場が拡大している状況である。次に第 2 レベルの遂行性があり、これはセカンドオーダーの観察に該当する。オプション取引市場の事例においてこれは、BSM モデルが周知の存在となり、BSM モデルを用いた他者の観察の観察に使われている状況に当たる。このレベルでは理論が現実を作り出す作用は確かに存在するが、他者が理論を参照してどのような予測や想定をもっているかに観察者の意思決定が依存しており、理論が予期した通りの現実が生じるとは限らないのである。

(2) 金融システム論の事例考察

以上のような、金融商品の格付けを中心としたセカンドオーダーの観察で構成される金融システム論を用いてエスポジトは、サブプライム問題を検討している。サブプライム問題とは、低所得者向け住宅ローンであるサブプライムローンの焦げつきによる金融機関の業績悪化から、2007 年の 6 月から 8 月にかけて起きた世界同時株安を指す [春山 2007: 9]。サブプライム問題が世界にもたらした景気後退の影響は甚大であり、象徴的な出来事として、米国大手投資銀行リーマンブラザーズが 2008 年に経営破綻したことはあまりにも有名である。

サブプライム問題は、1990 年代より段階的に発展した問題であった。米国の中産階級にとって、家族とプライベートな時間を過ごすことのできる住宅を保有することは、ある種のアメリカンドリームであった。この事情を背景に、住宅市場の高騰を背景に、住宅自体を担保として、住宅を保有したい低所得者 [サブプライム層] に対して通常より割高な金利や法外な手数料を設定してローンを組む、サブプライムローンが 1990 年代から米国で拡大した。

サブプライムローンの拡大にはとりわけ 3 つの要因が挙げられ [春山 2007: 47-69]、後述の議論を先取りすると、エスポジトの理論ではこの投資の拡大は現在の時点から予測した現在の未来にもとづく投資行為が行われる段階に当たる。第 1 に、カードローンに対して最低支払い金額を引き上げる規制強化である。無担保高金利のカードローンの多重債務が社会問題化した米国では、消費者保護のためカードローンの最低支払い金額を引き上げる法

規制が行われた。カードローンが儲からなくなってしまった貸付業者は、サブプライムローンを扱う不動産貸付に転じることとなった。第2に、新たな金融技術である証券化技術の開発がある。数百の住宅ローンをひとまとめの金融商品として自由に売買可能にし、証券会社が配当権を投資家に販売できる証券化技術が開発された。これによって、ローン共有業者が住宅ローンの不良債権を被るリスクが無くなり、貸し倒れリスクを気にせず無節制にローンを組み続けるビジネスモデルの喪失が不動産貸付業界全体に蔓延した。第3に、銀行の自己資本規制強化がある。ローンの増加に対応して銀行の自己資本を増やす自己資本規制強化によって、銀行は本来融資に回したい資本を据え置く必要があった。しかし、銀行は保有するローンを証券化技術によって売却することで、この自己資本規制を回避することができたのである。さらに、サブプライムローンの証券化商品に対して、格付け会社が一貫してトリプル A という高い評価を与えたこともあり [春山 2007: 151-4]、サブプライムローンの証券化商品への投資は拡大の一途を辿った。証券化技術や格付け技術といったリスク回避手法やこれを観察した他の市場参加者の取引行為の観察によって、現在の時点から予測した現在の未来にもとづくサブプライムローンへの投資が行われたのである。

住宅市場のバブルに依存したサブプライムローンの隆盛は、住宅市場のバブル崩壊によって突如終わりを告げるが [春山 2007: 71-116]、エスポジトの理論においてこの段階はまったく予期していない未来的現在の誘発になる。住宅市場のバブル崩壊とともにサブプライムローンの精算が不可能となった。2005年8月に米国の宅建会社の株が下落、2006年秋には米国の住宅市場も下落し、2006年冬に不良債権化したサブプライムローンを買戻す自己資本がない住宅ローン専門金融機関が業績悪化した。続いて、サブプライムローンを含んだ証券化商品への投資を投資家が控え、ヘッジファンドへの投資資金の担保の多くにサブプライムローンが含まれていたことが原因で顧客への投資金額の返済に追われたヘッジファンドが金融商品を大量に売却し、これを受けて投資家が金融商品を売却するループによって、世界同時株安が発生した。実際には、2007年6月にサブプライムローンの証券化商品に投資していた米国大手投資銀行ベアースターンズ傘下のヘッジファンドが経営危機に陥り、金融市場での金融商品の投げ売りから2007年6月～8月にかけて株価が世界的に大きく下落した。証券化技術や格付け技術といったリスク回避手法は不備のあるものであったにもかかわらず、サブプライムローンの契約や証券化商品の発行が継続され引いてはサブプライムローンへの投資が引き続き行われるという、楽観的な現在の未来を参照した経済行為によって誰もが予期していなかったであろう未来的現在が生じたのである。

この事例に関するエスポジトの分析は、現在の時点から予測した現在の未来にもとづく投資行為が、まったく予期していない未来的現在を誘発するというものである [Esposito 2009=2011: 128]。リスクを管理する一連の金融技術によって、金融市場の現在の未来は非常に楽観的なものになっていたが、そのリスク管理や予測可能性が実は不完全であったがゆえに、まったく考慮になかったリスクである未来的現在が現実に現れてしまったということである [Esposito 2009=2011: 181, 185]。焦げ付く可能性のある住宅ローン証券を自由に売

買することで、不良債権を手放せる証券化技術や、金融商品の商品価値を精査する格付け技術など、リスクを回避する金融手法やそれに対する他の金融市場参加者の態度や取引行為を観察することで、サブプライムローンへの投資が行われた。しかし、これらリスク管理手法自体の不備だけでなく、住宅市場バブル崩壊後のサブプライムローンの契約や証券化商品の発行の継続など、楽観的な現在の未来にもとづく経済行為が、破滅的な未来的現在をもたらしたのである。

第5節 結論と課題

本章が掲げたテーマは、「金融取引の時間論的論理とはいかなるものであるか」というものであり、このテーマへアプローチする上で本章はエスポジトの金融システム論の検討を行った。まず第2節では、エスポジトが参照したルーマンの時間論のうち近代社会の意味論として観察される現在／過去／未来の区別にかかわる議論を検討し、未来予測にもとづく現在の決定が予測されたものとはまったく異なる未来を作り出すことを確認した。そして第3節では、エスポジトが批判的に論点を継承した経済社会学の遂行性アプローチの内容を確認した。マッケンジーの研究を概観することで、①オプションは未来への予想に基づいて現在の値段が決定されるという時間的要素を含む存在であること、②未来への予想を決定する要素として経済理論が重視されていることを確認した。これに対してエスポジトは、遂行性アプローチが経済理論による金融現象の構成作用を明らかにしたことを評価しつつ、デリバティブに代表される金融商品は未来への予想に基づいて値段が決定されるという時間的要素を含む存在であり、また金融現象の構成作用の担い手には単に知識だけでなく取引や投資といった行為をはじめとした様々な要素が含まれることを指摘し、金融商品の価格予想やリスクやそれを参照して行われる行為によって成り立つ金融取引の時間論的論理を主眼とした金融システム論を構築した。第4節では、エスポジトの金融システム論の理論と事例考察を検討した。金融システム論は、金融商品の格付けを重要な参照項として、他者が経済理論を参照してどのような予測や想定をもっているかの観察にもとづく、観察者の意思決定によって金融市場が構成されていることを示した。エスポジトはこのルーマンの時間論にもとづく金融システム論を、世界経済に大幅な景気後退をもたらした2007年のサブプライム問題の考察へと応用した。そしてエスポジトはこの事例にかんして、以下の通りの考察を提示した。すなわち、証券化技術や格付け技術などリスクを管理する一連の金融技術、そして金融市場参加者の態度や取引行為を観察することで、非常に楽観的な現在の未来にもとづくサブプライムローンへの投資が行われたが、そのリスク管理や予測可能性が実は不完全であり、また楽観的な期待にもとづく投資行為が継続されたがゆえに、まったく考慮になかった世界恐慌という未来的現在が現実に現れてしまったのである。

本章での議論から明らかなように、エスポジトはルーマンが構築した社会システム論に全面的に依拠する形で、自身の議論を展開していることに特徴がある。エスポジトは、システム／環境、事象的次元／時間的次元／社会的次元、現在／過去／未来といったルーマンの

社会システム論を構成する基礎的な図式やとりわけルーマンも重点的に依拠したフォン・フェルスターの観察の理論を用いて、金融システム論を提示した。そして、記憶 (Esposito 2001)、ファッション (Esposito 2004)、確率 (Esposito 2007) など様々な対象に対して、社会システム論を応用している。つまり、ルーマンが社会システム論の道具立てで考察を行わなかった対象に対して、ルーマンの社会システム論を応用している点において、エスポジトの仕事は重要な意義を備えていると言えるだろう。ただこのような利点がある一方で、エスポジトの議論に残る不満として、ルーマンの社会システム論にみられる問題点の修正やルーマンの社会システム論に代わる新たな社会学理論の提示が行われていないということがある。これはエスポジトにとっての課題であるだけでなく、理論社会学においてわれわれに残された課題なのである。

注

- 1) エスポジトは、大学院ではウンベルト・エーコとニクラス・ルーマンの指導を受け、現在ビーレフェルト大学社会学講座正教授である。代表作として、社会システム論にもとづく記憶論を展開した『社会的忘却』[*Soziales Vergessen*]がある。邦語で読める資料として、2014年の来日で大黒岳彦と対談した内容が、『現代思想』2014年12月号に掲載されている。
- 2) ルーマンの社会システム論を継承しているエスポジトの議論については、①ルーマンのシステム概念などの社会システム論の基礎概念をどのように継承しているか、②社会システムの部分システムである経済システムにおいて金融システムがどのような位置にあるのかなど、ルーマン社会システム論との整合性に関わる論点が想定される。管見の限り、金融システム論について議論しているエスポジトの論考では、こうしたルーマン社会システム論との整合性に関わる論点へのエスポジトの言及はごく僅かである。後述するが、エスポジトの主眼はまずルーマンの社会システム論を新たな対象へ応用することであり、その点にまずエスポジトの議論の意義があると考えられる。①の論点について、エスポジトは1980年代中期～1990年代後期にかけて社会システム論の基礎概念を再解釈する研究を数多く発表しており、エスポジト理論とルーマン社会システム論との整合性に関わる論点はエスポジト学説史研究に残された課題であると言えよう。
- 3) BSMモデルは、1973年にアメリカの数学者フィッシャー・S・ブラックとアメリカの経済学者マイロン・S・ショールズによって発表された。このモデルの通称には、ブラックとショールズに加えて、その経済数学的基礎の確立に貢献したアメリカの経済学者ロバート・C・マーティンの姓が冠せられている。この功績により、ショールズとマーティンは1997年にノーベル経済学賞を受賞する。余談であるが、このマーティンはアメリカ社会学の巨頭であるロバート・K・マーティンの息子である。
- 4) この観察の理論において、観察者は必ずしも人間に限られるわけではないことには注意しなければならない [長岡 2006: 185]。意識システム (人間) だけでなく、社会システム

もまた観察者となる。

文献

- Adkins, L [2018] *The Time of Money*, Stanford: Stanford University Press.
- Aspers, P., Dodd N. and E. Anderberg [2015] “Introduction,” P. Aspers, N. Dodd and E. Anderberg eds., *Re-imagining Economic Sociology*, Oxford: Oxford University Press.
- Black, F. S. and M. S. Scholes, [1973] “The pricing of options and corporate liabilities,” *Journal of Political Economy*, 81(3).
- Esposito, E. [2001] *La memoria sociale: Mezzi per comunicare e modi di dimenticare*, Bari: Editori Laterza.
- Esposito, E. [2004] *Die Verbindlichkeit des Vorübergehenden: Paradoxien der Mode*, Frankfurt: Suhrkamp.
- Esposito, E. [2007] *Die Fiktion der wahrscheinlichen Realität*, Frankfurt: Suhrkamp.
- Esposito, E. [2009] *Il futuro dei futures: Il tempo del denaro nella finanza e nella società*, Pisa: ETS. (E. Esposito trans., *The Future of Future: The Time of Money in Financing and Society*, Cheltenham: Edward Elgar, 2011.)
- Esposito, E. [2013a] “The structures of uncertainty: Performativity and unpredictability in economic operations”, *Economy and Society*, 42(1).
- Esposito, E. [2013b] “Economic circularities and second-order observation: The reality of ratings”, *Sociologica*, (2).
- Esposito, E. [2018] “The time of money in finance and US society,” *Finance and Society*, 4(1).
- Kim, S. N. [2019] “On “infra-theory” or “infra-language”: A clarification of Actor-Network Theory via Bruno Latour’s case studies,” *Journal of Asian Sociology*, 48(3).
- MacKenzie, D. [2007] “Is economics performative?: Option theory and the construction of derivatives markets,” D. MacKenzie, F. Muniesa and L. Liu eds., *Do Economists Make Markets?: On the Performativity of Economics*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Merton, R. C. [1973] “Theory of rational option pricing,” *The Bell Journal of Economics and Management Science*, 4(1).
- Preda, A. [2007] “STS and social studies of finance,” E. J. Hackett, O. Amsterdamska, M. Lynch and J. Wajcman eds., *The Handbook of Science and Technology Studies*, the Third Edition, Cambridge, MA: MIT Press.
- Preda, A. [2017] “Machineries of finance: Technologies and sciences of markets,” U. Felt, R. Fouché, C. A. Miller and L. Smith-Doerr eds., *The Handbook of Science and Technology Studies*, the Forth Edition, Cambridge, MA: MIT Press.
- 相田洋／茂田喜郎 [2007]『NHK スペシャル マネー革命——第2巻 金融工学の旗手たち』日本放送出版協会.

- 梅村麦生 [2020] 「ニコラス・ルーマンの時間論」『社会学雑誌』(37).
- 金信行 [2020] 「遂行性アプローチと価値評価研究——ドナルド・マッケンジーの 5 概念の展開可能性」『日本情報経営学会誌』, 40(1・2).
- 國部克彦・澤邊紀生・松嶋登編 [2017]『計算と経営実践——経営学と会計学の邂逅』有斐閣.
- 小松丈晃 [2003]『リスク論のルーマン』勁草書房.
- 城田剛 [2017]「金融理論の実践を通じた市場の形成——金融商品・戦略・政策の遂行的側面の比較分析」首都大学東京大学院社会科学研究所 2017 年度博士論文.
- 滝沢弘和 [2018]『現代経済学——ゲーム理論・行動経済学・制度論』中央公論新社.
- 長岡克行 [2006]『ルーマン／社会の理論の革命』勁草書房.
- 春山昇華 [2007]『サブプライム問題とは何か——アメリカ帝国の終焉』宝島社.